

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 4 月 24 日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520165

研究課題名(和文) 大学におけるヴィジュアルリテラシー教育に関する調査・研究

研究課題名(英文) Research of Visual Literacy Education at Universities

研究代表者

茂登山 清文(Motoyama, Kiyofumi)

名古屋大学・情報科学研究科・教授

研究者番号：10200346

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円、(間接経費) 1,170,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、大学におけるヴィジュアルリテラシー教育を理論的、実践的の両面から研究をすすめた。理論的には、文献と欧米での調査を通じて、視覚教育に関する理論的基礎の構築を試みた。実践的には、名古屋大学のギャラリー等を利用し、展示やワークショップ、またそのフィードバックを取った。それらの成果を論文や国際会議、国内の学会等で発表した。最終年には、二人のゲストを招いて国際シンポジウムを開催し、国際的な研究交流をはかることができた。同時に、国内の研究者による多面的なヴィジュアルリテラシーに関わる発表の場も設け、それら一連の活動を通じて、ヴィジュアルリテラシー教育の研究と実践へ向けた基盤が形成された。

研究成果の概要(英文)：In this research, education of visual literacy in the university have been developed from both side of theory and practice. Theoretically, fundamental studies on visual education theory through texts and interviews in occidental countries have been sought. Practically, experiments and their evaluation were conducted in exhibitions and workshops utilizing Project Gallery [clas] of Nagoya University. Research results were presented in journals, international conferences and academic societies. In the last year, international symposium on visual literacy was held inviting two foreign guests. Paper and poster presentations by researchers of various academic fields were also given concerning visual literacy. Through this series of activities, a basis of theory and practice of visual education have been founded.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：ヴィジュアルリテラシー ガallery 視覚文化 国際研究者交流

1. 研究の背景と開始当初の状況

本研究は、コミュニケーションにおける視覚の有効性と、ヴィジュアルリテラシー教育の必要性とを主要な背景、動機としている。

コミュニケーションにおいて、視覚的なものが有効であることは、異なる分野から指摘されている。一例として、プレゼンテーションがどれほど記憶に残るかについて、図による表現が重要であるとの実験結果が、モーリス・A. プロナーによって報告されている。また、人文学的見地からは、バーバラ・スタフォードらが、視覚の力について多くの論考で強調している。デザインにおいても、インターネットを初めとする情報伝達において、やりとりされるイメージの氾濫は「津波」(リチャード・ソール・ワーマン)とも例えられるなかで、視覚は、知覚の重要な部分を占めるとされる。

そうしたなかで、ヴィジュアルリテラシーについては、ジョン・ディーベスを初めとして、多くの研究、著作がある。しかしそれらの多くは、言語モデルを基本として構想されており、視覚のもつ豊かさ、多義性にまでは十分に言及されていない。一方、現在、視覚について、積極的な研究活動を進めている美術史家ジェイムズ・エルキンスは、批判性と多文化主義との関係において、ヴィジュアルリテラシーの再構築を目指している。それは、いわゆるヴィジュアルスタディーズ(視覚文化研究)とは一線を画した、教養教育として位置づけられている。

報告者は、これまで名古屋大学教養教育院プロジェクトギャラリー「clas」の企画と運営に携わってきた。ギャラリー「clas」は、その趣旨として、「大学における視覚を通じた複眼的な思考と総合的な知識の育成」を謳っている。毎年約20の展示が、ほぼ2週間単位で開催されている。内容としては、写真や映像、アートなどの視覚的な資料の展示、授業の受講生の学習成果の発表、研究開発にかかわる実験の場などである。展覧会ごとに、通称「理解の手引き」と呼んでいるハンドアウトをスタッフが作成し、ギャラリー内に置くと同時に、トークを開催して、作品との距離を近づけるよう努力をしている。ギャラリーで取っているアンケートによれば、90%以上の来場者が「プログラムがたいへんおもしろい/おもしろい」と答え、また約98%が「大学にこのような施設があることがたいへんよい/よい」と答えている。そうしたデータからも大学におい

て、そうした視覚の場があることが、たいへん好意的に受け入れられていると考えられる。そのことも、視覚教育のより確固とした基礎づくりの必要を着想することになった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、以下の3点である。

1. 欧米における先進的なヴィジュアルリテラシー教育について調査すること
2. ヴィジュアルリテラシー教育の今日的な意味について基礎的考察をおこなうこと
3. 実際の教育にむけてギャラリー等を利用した実践的な活動をおこなうこと

これまでヴィジュアルリテラシー教育について、日本ではほとんど研究されていない。一部の大学(東京大学大学院総合文化研究科、立命館大学文学部、など)に表象文化を扱う講座やコースはあるが、それらは人文研究を主眼としたヴィジュアルスタディーズを主としている。一方、欧米ではすでに多くの大学において、カリキュラムが実施されている。シカゴ大学、ブラウン大学、コロンビア大学などの例が William Washabaugh によって報告されている(“Philosophical Bases for Visual Multiculturalism at the college Level”)。また多くの大学では、教養教育において芸術の実技教育もおこなわれている。報告者は、それら欧米でおこなわれている視覚教育の理念、そして実際について調査をおこなった。ヴィジュアルリテラシーという言葉が使われ始めるのは1960年代の終わりからのものである。それはカウンターカルチャーにやや遅れてのことであるが、そこでは多種多様な文化形態、特に視覚文化への基礎的な認知能力を高めようという意識が広がったとの解釈も可能と思われる。しかし、その後、約40年を経た現在では、情報とりわけ視覚情報の氾濫の度合いは激しいものである。そのなかで、視覚教育の意味を今日的な視点において捉え直す基礎的な作業をおこなう。

上で記したように、報告者は名古屋大学のギャラリーを運営してきており、その場を活用して、ヴィジュアルリテラシーの実践的な活動をおこなう。本研究の目的は、理論面のみならず、実践的な側面からも進められるべきであると考えているからである。

3. 研究の方法

研究の方法は、ヴィジュアルリテラシーに関する調査研究、ギャラリーでの実践的活動、

それらの成果に関する研究発表，そして国際研究交流である。

調査研究としては，初年度に，アメリカ合衆国，Richard Stockton College of New Jersey が主催校となって開催されたIVLA（国際ヴィジュアルリテラシー協会）の年次大会に参加した。あわせて，「9.11」の10周年をテーマに開かれていた写真展，写真と風景との相互の影響として興味深い「High Line」計画についても調査した。二年目は，フランスにおけるヴィジュアルリテラシーの現状を調査するために，『イメージリテラシー工場』の著者らからインタビューをおこなった。また欧米における先進的な研究成果である著作，Richard Howells, Robert W. Matson "Using Visual Evidence", Olivier Asselin, Johanne Lamoureux, Christine Ross (ed) "Precarious Visualities: New Perspectives on Identification in Contemporary Art and Visual Culture"（以上，初年度），Jessica Helfand "Screen: essays on graphic design, new media, and visual culture", John R. Hall, Blake Stimson and Lisa Tamiris Becker (ed) "Visual Worlds"（以上，二年目），Alberto Cairo "Functional Art, The: An introduction to information graphics and visualization" James Elkins "How to Use Your Eyes"（以上，最終年度）などを読み解いた。

ギャラリーでの活動として，当初最終年度に予定していたヴィジュアルリテラシーに関する調査のための展示「designVision」展を一年前倒して開催した。デザインに対するリテラシーを鑑賞と使用という二つの面から調査した。また，メディアと映像との関係を考察する「Various Media Photograph」展を，二年目のワークショップと展示を発展させ，最終年におこなった。

これらの研究成果を国際会議，国内の学会，ジャーナル等に発表している。詳しくは「4. 研究成果一覧」に挙げたが，国際会議では，e-CASE & e-Tech 2012 (Hong Kong), 6th Global Conference: Visual Literacies (Mansfield College, Oxford), 1st Visual Science of Art Conference (Alghero), 42th International Visual Literacy Association (Cyprus) など6回（国内の国際会議一回を含む）発表した。学会としては，日本映像学会，日本図学会などで，18件の研究発表をおこなった。論文と

しては国内のジャーナルに2編掲載し，国際ジャーナルにも1編掲載される予定である。

国際研究交流集会を，最終年度に開催した。国際シンポジウム「Academic Visuals, from the point of view of derrection/production」と題し，ヴィジュアルリテラシーの研究者でもあり制作者でもあるゲストを，カナダと英国（日本国在留中）から招いた。トレイシー・パウエン氏（トロント大学）は，北米大陸におけるヴィジュアルリテラシーの現状を読み解きつつ，情報学との関連においてマルチモダリティをキーワードに講演した。ジョン・トラン氏は日英比較の視点もまじえつつ，スナップ写真を取り上げてヴィジュアルリテラシーについて考察した。シンポジウムでは，あわせてこれまでの調査研究から視野に入ってきた横断的なジャンルの研究者による10本の研究発表をもつことができた。そうしたなかで，情報学から認知学まで，文化の多様性と，ヴィジュアルリテラシー教育の共通性を確認することができた。また，それを元に論文集としてまとめた。

4. 研究成果の一覧

論文

(1) 茂登山清文，風景写真のメディアとイメージャリ ハイラインと《Memory Remains》，超域的日本文化研究JunCture4号，第4号，Pp.64-74，2013,3

(2) 茂登山清文，退屈な「大海原」の岸辺で 幸村真佐男《People Gazing》と「大幸村展プロジェクト」，超域的日本文化研究JunCture5号，第5号，Pp.171-176，2014,3

研究発表

(1) HAYASHI Momoko, MOTOYAMA Kiyofumi, Reducing Information in the Process of Image Retrieval: a Tool for Image Literacy, e-CASE & e-Tech 2012 Hong Kong, 2012.03.30-04.01

(2) 茂登山清文，イメージによる風景の創造 ヴィジュアルリテラシーとプロダクショ，2012年度日本図学会春季大会，第136号 pp.115-117，2012,5/12-13

(3) 荘司陽太，茂登山清文，イメージの理解を深める写真体験 -中川運河の写真を使ったワークショップの実施-，2012年度日本図学会春季大会，2012,5/12-13

(4) Momoko Hayashi and Kiyofumi Motoyama, Open-end Image Retrieval System via Real Cultural Resources, 6th Global Conference:

Visual Literacies , Mansfield College, Oxford , 2012/6/3-5

(5) SHOJI Yota, SADAKUNI Shingo, MOTOYAMA Kiyofumi , Photograph experience which deepens an understanding of images- Development of the website with the photographs of the Nakagawa Canal - , 1st Visual Science of Art Conference , Conference Centre of the Carlos V Hotel , 2012,9

(6) 茂登山清文, 展示施設における教育の可能性としてのヴィジュアルリテラシー 名古屋大学プロジェクトギャラリー「clas」の試み-, ICOM-CECAアジア太平洋地区研究集会, ICOM-CECA Asia-Pacific Regional Meeting 2012 , 2012,11/30-12/01

(7) 石川裕菜, 中島健志郎, 茂登山清文, デザインリテラシーに関する調査-designVisionを通じて-, 日本図学会中部支部2012年度冬季例会, 2013.3.2

(8) 山室 南, 茂登山清文, 色覚特性の見地から見た教材におけるサイエンスビジュアリゼーションの事例分析, 日本図学会中部支部2012年度冬季例会, 2013.3.2

(9) 星 卓哉, 茂登山 清文, MINDSTORMS NXTに他のLEGOパーツを加えたことによる教育効果, 日本図学会中部支部2012年度冬季例会, , 2013.3.2

(10) 林桃子, 茂登山清文, 写真の焦点と被写界深度に着目したイメージの見方, 2013年度日本図学会春期大会 , p.25-p.28 , 2013.5/11-12

(11) 茂登山清文, 風景写真におけるヴィジュアルリテラシー「透視力」と「不透明」, 到来するもの-, 2013年度日本図学会春期大会, 2013.5/11-12

(12) SEONG Jieun , MOTOYAMA Kiyofumi , A System to support art appreciation by sharing information of viewers ' behavior and profiles ,The 42th International Visual Literacy Association (Republic of Cyprus) , 2013.08.30-9.02

(13) 山室南, 茂登山清文, 色覚特性の見地に基づくサイエンスビジュアリゼーション支援, 第3回情報文化学会中部支部研究会 , 2013,9/21

(14) 稲垣拓也, 茂登山清文, ARを活用した, アーカイブ化された展覧会の体験と知識の伝達, ヴィジュアルリテラシー国際シンポジウム, 2013.10.12

(15) 成知垠, 茂登山 清文, 鑑賞者の行為とプロフィールの共有による作品鑑賞支援のアプリケーション, 2013年度日本図学会秋季大会, pp. 57-60, 2013,11/16-17

(16) 林桃子, 茂登山清文, 写真の焦点と注視点からみたイメージの領域, 日本映像学会中部支部第2回研究会, 2013.12.14

(17) 稲垣拓也, 茂登山清文, 過去の展覧会の仮想的なオンサイト体験, 2013年度日本映像学会第三回研究会, 2014.2.13

(18) MOTOYAMA Kiyofumi , Art and Media: Non-Word Dictionary, Whole font catalogue, Life log by Kohmura Masao, and Nakagawa Canal Project , Conférence Maison Universitaire France Japon , 2014.3.17
展覧会

(1) ワークショップ・展示「中川運河の写真で遊ぶ」中川運河漕艇センター研修室, 2012.9.17-23

(1) 展覧会「designVision」名古屋大学教養教育院プロジェクトギャラリー「clas」, 2012.11.19-30

(1) 展覧会「Various Media Photograph」名古屋大学教養教育院プロジェクトギャラリー「clas」, 2013.12.2-13

5. 研究の今後

本科研の成果をふまえ, さらに三年間の予定で理論と実践という両面から研究を発展させる。理論面では, これまでの調査研究の中で築いてきた国内外の研究者との交流をもとに, 共同研究をすすめる。また実践面では, これまで主にギャラリーでおこなってきた活動を, 大学の授業において実践する。同時にその基礎理論を構築することである。そうしたなかで, ヴィジュアルリテラシーに関する理論的基礎と, 授業カリキュラムを構築することをめざしていく。